

6. 恩師からのメッセージ

近 況

元化学工学科教官 金崎 健児

25年間勤めた会社を辞し、千葉の地から、故郷の門司に帰り、老両親を守り、見送って昭和48年から59年までの11年間北九州高専でお世話になった。定年退官後の昭和60年、二人の娘たちが嫁いでいる千葉の地に復帰して現在に至っている。

86才の今、高専創立40周年記念の同窓会誌への原稿執筆依頼とともに懐旧の情にかられも、両眼の視力低下により難渋しながらも筆をとっている。

つい先日、化学工学科1期の長野君の来訪があった。九州から所用で上京とのこと。久しぶりの話に心とむ一時であった。このときの雑談の中で、彼が見た現実の工場災害事件のことが話題になった。

前期末試験終了後、工場見学旅行が計画され、このときの引率を新米教師の私がやることになった。見学対象を千葉県臨海工業地帯の石油化学コンビナートに選び、宿舎は私が世話になった工場のクラブとした。宿した夜10時ごろ、工場群の方向で起こった異常音に集まって来た学生諸君の目の前で、闇の中を火が走り、爆発が起こった。学生諸君はただ驚愕するのみであったが、工場から1km位離れたクラブからは、細部まではうかがうことができなかった。長野君は、怖かったと述懐していた。

この工場は、コンビナートを構成する一つであり、この事故で死傷者が出たために、我々の見学対象から除外されることになった。

今年は、前大戦集結から60年。この大戦の始まった昭和16年春、私は大学三ヶ月繰上げで卒業し、翌1月、海軍技術科士官として勤務した。12月8日、開戦の報との大本営発表を聞いたとき、人生25年

を覚悟したが、命長らえて、予定した25年の3倍以上の馬齢を重ねている。



関東支部同窓会、左から故原口先生、金崎先生、入江事務局長（9期機械）



関西支部同窓会、教え子とともに「もう一軒行くよ」

一枚の年賀状

元電気工学科教官 岡 篤美

先ず最初に北九州工業高等専門学校が創立40周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

昭和40年、創立された北九州高専に、電気工学科ではただ一人の教員として勤務することになった僕は、会社勤めを辞めたばかりで教育経験は皆無でした。

仕事の主なものは来年度から始まる電気工学基礎実験に必要な器具を整備することと、唯一の専門科目電気製図の講義をすることでした。元来製図が嫌いでも機械工学を選ばず電気工学を選んだ僕には、製図の教科書を手にするのは初めてでした。僕は目の色を変えて電気製図のテキストを勉強しました。生まれて初めて教壇に立った新米教員の僕を、学生諸君はどんな目で観察したでしょうか。

ある日僕は提出された製図を見ながら採点をしていました。そのとき後ろから「先生！」と声がかかりました。振り向くとW君が立っていて、「僕達がそれを一枚仕上げるのに何日かかると思いませんか。先生はそれをどのくらい時間をかけて採点しているのですか？」と。突然のことで僕はどぎまぎしてしまいました。僕が何分と答えたかは記憶にありませんが、彼はひょっとしたら僕が製図が嫌いだと見抜いていたのかもしれません。

このようにして手探りで僕の教員生活が始まったのです。2年目からはベテランの中西先生と新進気鋭の田中先生が着任されました。僕は苦手の電気製図から解放され、電気回路を担当することになりホッとしました。と同時に高専を卒業した学生諸君が社会に出た時、”電気工学のこんな基礎も知らないのか”、と思われては北九州高専の名がすたると思い、なにがなんでも基礎知識を身につけて貰わねばと、一生懸命講義ノートを作り、試験をして、欠点を取った学生諸君には何度も再試験をしました。

ある年の正月”3年電気寮生一同より”として、別掲の様な年賀状が届きました。女房は「上手ね！そっくりね！」と大喜びでしたが、僕は惘然たる心境でした。しかしよく見ると何処か似ているし、学生諸君の偽らざる心境かなと納得し、よく描けていると感心しました。著者は確認してはいませんが、何度も再試験をしたA君だと思っています。彼は方

向を誤ったのだ。それにしてもよく描けている。うまい！それで今まで大事にしていました。今この歳になってみると、懐かしい思い出として大事に取っていて良かったと、つくづく思っています。ついでに僕の現状を撮した写真を掲げておきますので、じっくりと比較していただきたい。似ていると思う人は手を挙げて！

家内の高校の同窓生で、高校の校長を歴任され、退職後北九州高専の数学の非常勤講師を数年勤められたO先生が、最近家内に「高専は良かった！生徒が良かった！とても楽しく、講師を務めさせて貰った」と褒められたそうです。家内に有名な進学校の学生さんに較べても？と念を押すと、「いやー、もっと良い資質を持った学生さんが多いよ」と言われたとかで、とても嬉しかったと言っていました。

だいぶ以前のことで、ウイーン国立歌劇場にオペラを見に行きました。幕間に劇場の階段を豪華な周囲の景色を眺めながら登っていると、上から降りてきた男性に「先生」と声をかけられました。驚いて見上げると、なんと化学工学科6期のT君でした。こんな所で何をしてるのと訊ねると、建築家と一緒に仕事で来ていて、明日はブダペストに行きます、ということでした。化学工学とは無関係と思われるデザイナーとして活躍し、グラビア雑誌にも取り上げられたこともある、高専卒業生としては異色の存在の一人といえましょう。また最近長年住み慣れた宗像から前原に引っ越をするとき、電気10期のB君に一方ならぬお世話になりました。電気工学とは無関係のことです。

勿論卒業生の多くは高専で学んだことを基礎に、それぞれ専門の分野で活躍され、なかには学位を取得された卒業生もいます。一方前述のT君、B君、更には弁護士として活躍しているD君等々、全く違った分野で活躍している卒業生も少数ながらいま

中学を卒業したばかりで、ある意味で人生の進路を決めなければならなかった本校の卒業生の皆さんは、ある人は高専で学んだ専門の道を、ある人はもっと自分に適したと思う違った道をと、それぞれに懸命に努力し、活躍しておられます。有名無名地位の上下は無関係です。今にして思えばO先生のいわゆる通り、みんな素晴らしい学生さんばかりだったのです。僕は目の色を変えて、あれもこれもと厳しく講義すべきではなかった。それよりも学生の皆さんにとって、もっと分かり易く、もっと楽しい講義が出来るように、そして楽しい年賀状をいただける様に、学生諸君よりも僕自身がもっと勉強し、工夫すべきだったと、つくづく思っています。この歳になってようやく気づくとは、”遅い！”と大向こうから声がかかりそうですね。今更ながら残念で、恥ずかしく、忸怩たる思いです。

入江先生から投稿のご依頼を受けたこの機会を借りて、嘗て教師と学生という縁で結ばれた皆さんに、敢えてこの駄文を綴って、お詫びといたします。御免なさい。

卒業生の皆さんのご健康とご活躍を心より祈っております。



言葉は通じていますか



元一般科目教官 徳満 澄雄

長い間教師をしていると、自分の発した言葉が誤解されて、憎まれたりすることが多い。これは、高専に転勤する直前の高校教師の時のことである。

ある日の朝礼の時、一人の女子生徒が（仮名Mとする）が、「今募集している、あるお菓子屋の売り兼事務員に推薦してほしい。」との申し出があった。私はMが幼年時代からお菓子屋に勤めたいと思っていることを知っていた。Mは美貌で成績もよく、その姿がお菓子屋に立っている姿を思っ、適当だと半分は賛成したが、その菓子屋は名前を言えば北九州の人なら誰でも知っているほどの有名店だった。しかし、そこの三代目を継ぐべき男性が女ぐせがとても悪くて、卒業生で、そのお菓子屋に勤めた人が、その実体を報告していたので、私たち就職斡旋係の教員は、風のうわさでそのことを知っていた。そこで私は、とっさに、「君はだめだ」と言った。私は朝の多忙さもあって、言葉でそう言ってM子の希望を拒絶した。その理由は、M子が希望する菓子屋を受験すれば、かなり確実に合格して、女ぐせの悪い三代目候補の毒牙にかかるに違いないと思ったからだ。私は、それはそれで良かったと自分一人で納得した。ところが、卒業式後の宴会の時、M子の父親が、「なぜ私の娘は某お菓子屋にだめだったのですか」と抗議を受けた。そこで私は理由を詳しく説明した。「今まで、娘と私の家庭はあなた

を憎んでいた。しかし、今日のお話で、実は娘を守っていただいたのだと知ってはじめて安心しました。」と、今までの憎悪が感謝の念に一変した。以後私は言葉は筋を通してゆっくり説明しなくてはいけないことを知った。

これは女子大学に転勤した直後のことである。開学記念日はバスで、外に出ることになった。高知県は植物学で有名な牧野富太郎博士の出身地であるということにかかわって、かなり充実した植物園がある。

私は、転勤したばかりで、今まで男性の生徒にばかり話しかけていたので、側にいたR子に「この花は何の花か」と質問した。すると、「シラン」ということばが返ってきた。18歳の女子学生は、時に男子より言葉使いが乱暴とかねてから先輩たちに教わっていたので、私はその語を「知らない」の意に解した。その後植物図鑑などをめくっていると、例の花が出ていた。その名は「紫蘭」であった。あの学生はその花の名を正確に教えてくれていたのだ。私はそれまで「なんて乱暴な、失礼だ」と怒っていたことを反省した。

漢字で書けばすぐわかるものを口に出すと、専門用語などを使ったりする時は、特に注意を要する。

学生時代はまわりの人が、先生や親か友人かで単純な社会に住んでいたもので、つい学生言葉で話してしまうが、妻に子どもに父親としての自分の意見を正確に伝えることは難しい。上司や部下の者に軽々とものを言うのはやめにしよう。理科系の人には美辞麗句は必要ではない。得意の「理」（ことわり）をもって、わかりやすく表現すれば良いのである。そのためには時間と根気が必要である。



関東支部同窓会、中央が徳満先生、その左側が故上杉先生

感謝とはげまし



元制御情報工学科教官 郡山 武二

学校の創立40周年おめでとうございます。40年間の長い間学校の発展のためにご苦労された学校関係者の方々に敬意を表します。

私が定年退官した平成2年より15年経ちましたが、この15年間の日本の状態はかつてない苦悩の連続となりました。バブルの崩壊による不況の発生とこれに伴って発生した企業の倒産、リストラ、銀行の破綻など、また年寄りにとっては頼りにしていた銀行利子が0%近くになるなど、想像を絶する事態に茫然となってしまいました。このような状態になった原因は今いろいろ分析検討されているようですが、今年4月に発生したJR西日本の列車大惨事の中に、根本原因の一つが示されているのではな

いかと思います。人を結ぶ企業としての基本的な理念であるべき「安全に」という考え方がないがしろにされて、利益を優先し人間の効率化の手段としか考えないという経営理念の貧困さが、事故を引き起こしたと考えられるからです。いまだに経営に苦しんでいる企業も、バブルに踊らされて経営の理念が曖昧になったからではないでしょうか。

私が接した学生諸兄は35才から45才前後で仕事をされていると思います。まさに中堅幹部、あるいは指導者という立場ではないでしょうか。最も頼りにされると同時に苦しい場面にも遭遇されることでしょう。どうか自分を見失わず基本に忠実に精進なさってください。いつかはきっと報われるときがくると思います。

私の家の客間には、私が退官する年の最後の設計製図の授業風景を写した写真が飾ってあります。

(平成2年3月卒業の写真部の馬場祥詞君の作品) 私が笑いながら学生と教卓を挟んで話しているところを写しています。これを見るたびに学校のことを思い出しニッコリと嬉しくなります。

私の第二の人生を楽しく過ごさせてくれた高専も、学校の運営方法など大きく変わってゆくようですが、関係者の方々のご努力で更に発展してゆくことを祈っています。



郡山先生退官祝賀会（H2・1・3）での岩渕先生・緒方先生・郡山先生

私の高専時代

元一般科目教官 山内 一秀

私の手元にある、写真で思い出を綴ることにします。

着任早々、徳満澄雄先生に誘われて機械工学科5期の諸君と久住登山。坊がづるでキャンプ。学生持参の食料の鶏が凍死。皆、自然の厳しさにショック。私は学生が鶏を持参したことにショック。



機械工学科3期の桑原良宣君に誘われてワングルの顧問に。その後、度々久住山に登りました。次の写真は化学工学科1期生の河原一雅君、機械工学科7期の藤井敏行君と共に。





雪の久住、すごく魅力的でした。海拔 1303m の法華院温泉は登山の疲れを癒すのに十分なご馳走。



3 年生での修学旅行。各年に問題あり。ついに中止の憂き目に。こんな時担任。



仕事上、卒業生のおめでたに再三のお付き合い。写真は機械工学科 7 期の田畑忍君の披露宴。



生まれて初めてで終わりの表彰。(勤続 20 年表彰、田口校長より)



40 年間学生が自殺しないように。自分の能力を知る手伝いをするんだと一人で勝手に決めて学生指導。無事退職。中には不肖の学生(機械工学科 9 期の入江司君)「学位を取りました」と報告に。青は藍より出でて藍より青し。終わり良ければ全て良し。

最後に平成 16 年 7 月、二人きりの修学旅行、奈良東大寺で。



北九州高専創立40周年を祝して



元一般科目教官 海老田 輝巳

北九州高専が創立されて40周年を迎えました。誠に御同慶にたえません。一口に40年とは申しませんが、この間には社会情勢の数多の変遷があり、北九州高専もその影響を蒙りながら、今日の隆盛に至ったことは、教職員の教学への熱愛、学校関係者や保護者後援会の方々の御協力、在学生の努力によるものです。同時に同窓生の皆様の母校への寄与貢献の大きいことを見逃すことができません。

不肖、私は1974(昭和49)年から1993(平成5)年までの19年間、北九州高専に在職致しましたが、赴任当時はモノレールが走っている所が小高い丘陵で、バス道路、学校の近くには田畑が多く、牧歌的な雰囲気が残っておりました。在職中に図書館、第2体育館、雄志台会館、電子制御棟、その他の施設が続々と建てられ、機械工学科、電気工学科、化学工学科の三学科に電子制御工学科、制御情報工学科の二学科が増設され、充実発展期の中で過した気がします。他方、赴任した頃は石油ショックによって学生諸君の就職困難の事態が発生し、退官時にはバブル景気とその崩壊によって深刻な不況時代が到来しました。このような状況下にあっても、学生諸君は逞しく伸び伸びと学生生活を過ごしていたように思います。

昨年9月、久しぶりに北九州高専を訪れ学内を歩きましたところ、新しく建てられた多くの

施設を目のあたりにして、益々発展していることを痛感しました。私の在職していた頃の充実発展期から隆盛期に入っていることを実感しました。時々、新聞で北九州高専の研究成果や学校の佳き状況の記事を見ると欣喜します。今後、科学技術の殿堂として更なる発展を祈念致します。

最後に同窓生の皆様の御活躍・御多幸をはじめとして、教職員の皆様、学校関係者や保護者後援会の方々、在学生諸君の御多幸を祈念致します。



平成5年度同窓会で挨拶される海老田先生(手前)と山内先生

威風堂々40年

元制御情報工学科教官 佐藤 淳一

北九州高専の創立40周年を迎え、おめでとうございます。

創立当時の1965年、35億人だった世界人口は、現在では66億人になりました。この40年間に世の中は大きく変動し、国際的にも国内も政治、経済、社会システム、環境、気象などの地球状態もいろいろ変化しました。

卒業生の皆さんは、北九州高専で得た基礎知識を生かし、それぞれの分野で多くの経験を積み、社会に貢献していると思いますが、今後も更なる活躍を期待します。

世の中はすべて危険と隣り合わせですから、あらゆる場面で、将来起こり得る欠陥を十分に予測し、適切な対応をするように気をつけて下さい。

学生会歌は1期生の一里塚君の作詞で、当時音楽担当の中村清治先生の作曲です。中村先生は現在も北九州合唱連盟の重鎮として指導しておられます。

威風堂々と北九州高専および卒業生の皆さんの将来の一層の発展を祈ります。



機械工学科1期生、50歳お祝いの会（熱海）

雄志台の発展

元機械工学科教官 川口 巖

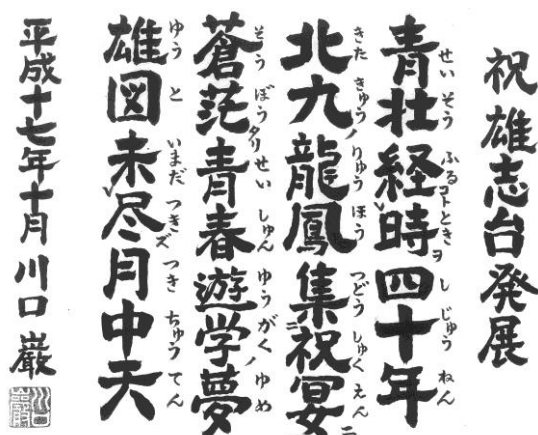
創立40周年、誠におめでとうございます。その間、多くの卒業生、エンジニアの卵を産業界に送り込んで、日本の技術発展に大きな貢献をしてこられ

た実績を誇りに思います。

私は、企業での技術経験を、プラスの形で学生に伝えるべく、昭和61年4月に本校に着任し、機械17期生から26期生まで、機械工学科720名の巣立ちを見てきました。

高専生の明るさと元気な頑張りと一緒に経験し、そして、その成長の一翼を担うことができたことは、私の人生の大きな喜びです。

創立40周年の佳節に当たり、雄志台の更なる発展を祈念して、精神を込めて漢詩をつくりましたので、ここに紹介して、同窓の皆さんに献上します。



我等が母校北九州高専は
創立四十周年を迎えた
同窓の卒業生一同
龍となり鳳となって
記念の祝宴に集っている
高専五年の青春時代
思う存分に学び遊んだ夢は
遠くかすんで懐かしい
みんな青年壮年になったが
まだまだ やる気充分
中天の月のように輝いている



関西支部同窓会で挨拶される川口先生



同窓会で教え子と歓談される先生（中央、右側には石橋先生の姿も）

もっと褒めていたら



元一般科目教官 秋吉 稔

高専の英語の教師として私が一番教えた科目は、主として文法と英作文を教える「英語B」

です。1, 2年生の授業ではできれば「英語B」を持ちたかった。

退職したいま、男声コーラスやダンスを習い始めて、---つまり生徒の立場になってみて---先生から「ほめられる」ことがどんなにうれしいことが、やっとわかりました。「そうです。そのとおり、よくできましたね」。学生へのこの一言の重要性が現役の教師時代の私のにぶい頭には思い至らなかったのです。

夏休みと冬休みの前の校舎外の大掃除では、私は英語Bを教えていた2-Mの学生と共にテニスコート下の溝掃除が割り当てられました。作業中、たまたまK村君と話がはずみ、植物や畑の話題になりました。

K村君「先生はサツキは好きですか」私「好き。10鉢くらいは持っている」K村君「うちの父がサツキを育てているので、一つもらってきてあげます」私「そんな大事なものをもらうわけにはいかない」K村君「大丈夫、父に頼んでみます」...というようにきさつで、K村君はほんとうに見事な大鉢のサツキを学校に持ってきてくれました。その大鉢は私が育てていた、ちまちました鉢の中にあって、ひときわ異彩を放ち、毎年6月になるとたくさんの真白い花をつけてくれました。咲いた花を眺めるたびに卒業していった若きエンジニアの現在を思いました。

一昨年からそのサツキが枯れ始めた。時期はずれに過剰な剪定をしたせいでした。高橋尚子はほめられて大成したと聞きます。花もほめて育てよといいます。やはり咲いた花にも人と同じように話しかけ、ほめてやり、適期の剪定をしてやっていたらと悔やまれました。一気に樹勢が弱り、去年の春とうとう枯れてしまった。ゴメンと詫びてはみしました。これだけはぜったいに枯らしてはいけない一鉢でした。思い出の絆が切れてしまいました。パチがあたった

のでしょうか。

私より若くして現役中により親友を亡くしてしまった：岩渕先生、上杉先生、原口先生。

大学編入が始まった当初の放課後の英語特訓。まるで乾燥した海綿が水を吸い取るように文法が英文和訳に生かされていなかった。自分もそうだった。習った試験範囲の英訳を覚えるのは何の苦もなかった。

「猫の背をなぜながら日向ぼっこ」的生活ではなく、ほぼ毎日外に出て余計なことに手を出しています。

つれづれなるままに

元機械工学科教官 松村 暁

今年は北九州高専創立40周年とか。同慶の至り、先ずは衷心よりお慶び申し上げます。北九州高専は昭和40年に設立されそれから40年が経過したので昭和の年号に直せば今年は昭和80年ということになる。私事ながら、私は昭和10年生れ。 $80-10=70$ 私の古希も切良く算出できるのは嬉しい。30周年は還暦、50周年は命永らえていれば傘寿とどこまでも区切りが良い。

昭和40年と言えば、我国が工業立国として本格的に始動しだした頃で、工業界から高級技術者の育成が強く要請され、それに呼応して設立されたのが工業高等専門学校である。爾来高専の卒業生は今日の我国の工業国としての繁栄を支えてきたし、設立の所期の目的をはるかに超えたものであったと信じる。私がその高専の教育にささやかではではあったが関わらせていただいた事は私の生涯にわたっての矜持である。

辞典によると「工業」とは、原料や粗製品を加工して有用なものとする産業とある。今日ほど工業の恩

恵を享受している時代はかつてない。しかしながらこの事は有限な地球上の資源を急激に消費していることを心すべきである。

最近 3R (reduce reuse recycle) が盛んに言われ始めた。ノーベル平和賞を受賞された Mrs. マータイが来日されて“もったいない”と言う日本語にこの 3R の思想が集約されているといみじくも言われた。その感性の鋭さに脱帽、さすがノーベル賞受賞者である。今年の流行語大賞はこれで決まりだろう。

私は退官後、故郷に帰り晴耕雨読の日々を送っている。大自然の中に身を置きつつ、この平和と豊かさをしみじみと感じながら日本や世界の将来に思いを馳せる今日この頃である。

終わりに当り、北九州高専卒業生の皆様のご健勝と益々のご活躍を祈念致します。



歩行大会で平尾台へ 弁当の後のひと休み



父の日にイタリア料理店前で孫と

70にして教わる

元機械工学科教官 村井幸治郎

創立 40 周年おめでとうございます。創立 4 年から 34 年まで 31 年間お世話になりました。人生は教わるのが大切で、今は反省している毎日です。

反省・・・31 年間に私は本当に良い授業をすることができたでしょうか。くだらないギャグで寒くなかったでしょうか。残念なことに退学された方もいます。しみじみと反省しているあいだに、学校も少子社会を迎えます。

少子・・・仕事と妊娠、出産、育児を両立させる時代です。女性にしても、男性にしても、共に最高の人生を築き上げていかねばなりません。

人生・・・昔は飲む、打つ、買う。今はマンガ、ゲーム、出会い系サイト。昔も今も変わらないのは地位、名誉、財産。人生にはいろいろな競争もあります。

競争・・・子供のころは遊びで、学校では成績で、受験時は合格で、サラリーマン時代は昇進で、年金生活では健康で元気な長寿でしょう。

長寿・・・快食、快眠、快便ですが、長寿村で長寿食や長寿運動を実行すれば長寿ができるでしょうか。なんと言っても腹八分です。腹六分はなお良いでしょう。不快な満腹よりも快適な空腹で我慢します。高齢社会になります。

社会・・・無・空。時間・空間。自由・強制。平等・差別。平和・戦争。文化・文明。政治・経済。管理・運営。安全・危険。事件・事故。愛情・憎悪。理想・現実。本音・建前。発明・科学。科学・技術。技術・技能・・・

技術・・・科学、技術が進歩して今日の文明を築いてきたが、地球温暖化をもたらした。自然が破壊されない技術、人間の心を育てる技術が必要です。

温暖・・・地球の水が少なくなると温暖化は一気に進みます。自然は追いつけません。人間の立場の英知が試される時期になりました。

立場・・・価値観が違うのに相手の立場で考えるのは無理です。会話が「そうですね」「なるほど」「それですね」などで続けば良いでしょう。

終わりに、北九州高専の益々のご発展と皆様方のご多幸を望んでやみません。



退職後、香港旅行での一コマ



関西支部同窓会での卒業生との語らい

この写真の思い出

元電気工学科教官 熊谷 淳

この写真は、昭和 41 年 4 月吉日 今から 39 年前に撮影したもので、2 期生が入学して数日後の昼下

がりである。

以前、誰かが、ここは裏門ですかと言ったが、ここは北九州高専仮校舎の正門である。仮校舎の場所は、現在、小倉北区大門の原爆のエンブレムがある公園になっており、市立図書館のすぐ南側である。

この日は朝から歩行大会があり、ここ大門から田代峠まで往復した。往きは各クラス列をつくり行進した。現地の峠で弁当を食べた後、自由に帰ってよい、ただし、先頭に行く学生は校旗を持つことということであった。

我々、教職員は、帰路も往きと同じような状態を想像していたが、何のことはない皆走る走る。これが本校の伝統となり、後年長く続いた平尾台歩行大会でも走って帰るのが当たり前になっていた。小生も走った経験があるが遠い昔のように思える。

先頭の学生は竹竿に旗を巻きつけ小脇に抱えて走ったとのことであった。多分、写真の旗がそれだと思う。写真中の教官が眺めているのは、木町の方角であり、自分等より遅く戻って来る学生を見ているのである。

当時は何をしても第一回が付いた、この行事も翌日には北九州高専が第一回の歩行大会を行ったと新聞に掲載された。



仮校舎時代の思い出

隣の奥様は息子の同級生

元制御情報工学科教官 佐藤正視

「続けて作業をされて大丈夫ですか。」「問題ありませんよ。別に重労働ではありませんから。」ある日曜日の隣の奥さんとの会話である。その日は町内会の一斉清掃日で、僕らの組の担当は、日頃子供たちが良く使う公園に付属する駐車場の掃除である。小山の上にある公園の下にある駐車場は、二方を、背丈を越す石垣で囲われていて、雨のたびに土砂が流れ込み、年2回の清掃日には、堆積した土砂を取り除くのが大きな作業の一つである。平鍬と松葉掻きという大道具を、何時も携行する僕が中心になって作業することになり、汗もかく。この日は、一斉清掃のあと、隣家に出張っている我が家の生垣を切る約束をしていたので、頭書の会話となったのである。

「ちょっと汗をかいているくらいで年寄り扱いしなさんな、農作業や土木作業ならまだまだ人に負けないよ。」と言いたかったが、何しろ若くて美人の奥さんなのでついトーンダウンしてしまう。作業中、奥さんは僕が切り落とした枝を集める手伝いをして下さっていた。雑談の中で次のようなやり取りがあった。「佐藤さんには男のお子さんがおられますか。」「はい、いますけど。」「しんいちろうさんというお名前?」「はい。」「あ、やっぱり。最初は知らなかったのですが、友達が来たときに教えてくれたんですよ、ここはまるしんのうちだよ。わたし、中学時代の同級生です。」まるしんとは、息子の中学時代の呼び名である。なんと隣の奥さんは、息子の同級生なのである。ああ、やっぱり俺は年なんだ。その夜はショックで眠れなかった。

そういえば、近頃スーパーで「ん?」と思うことがある。つり銭を渡すとき、ちゃんと手の中に小銭が納まるように、両手で僕の手を包む様な仕草をす

るレジの人が増えたことだ。最初は僕に気があるのかなと思っていたが、どうもそうではないらしい。年寄りだから粗相をして、小銭を落とさないように配慮しているのだということが近頃分かってきた。僕の前で買い物をしている若い人に対しては、そんなつり銭の渡し方をしていないからだ。馬鹿にするな。でもショック。

ということで、最近、否応無く年齢を感じさせられていますが、楽しいことも又多く、快適な毎日を送っています。



在職中、教官の親睦会を積極的に進められた佐藤先生
(後列右から3番目、めだたない先生?)

創立40周年おめでとう

元一般科目教官 中野武彦

北九州高専、創立40周年おめでとうございます。昭和42年10月に新米教師として赴任し、“俺について来い”の精神で学生諸君と一緒に汗を流した経験は私にとって、忘れられない思い出であり、長い教師生活の中でも一番充実し、学生諸君に負けにくい頃の青春時代を過ごしました。本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

高専は15歳から20歳まで5年間の一貫教

育であり、中学を卒業し、いきなり学生となることから、自由な校風で部活動にもおのびのびと取り組めるところが素晴らしかった。“学生”とは「生き方を学ぶ」と読めます。生徒と違い自主性を尊重され、一人ひとりの学生がたくましく成長する姿は教育の原点であると確信しています。授業時間も高校と違い大学と同じ90分授業であり、体育も自由にカリキュラムを組むことができました。3年までのクラス単位の授業で印象に残っているのは1年での長距離走の授業を思い出します。近郊の山を駆け巡る授業はなかなか好評でした。ある時は雪山に入って、戸惑ったこともありましたが。また、予想タイムでチームを分け、競った駅伝は他の授業の先生から“うるさい”とクレームがくるほどの盛り上がりでした。3年ではサッカーやラグビーを泥だらけになりながらボールを追っかけ、誇らしげにグラウンドの階段を上って来るさまは高専でしか経験できない授業でした。4年では全クラス合同の選択授業を開講し、体操で大車輪やバック転に挑戦する学生がいたことを思い出します。また、母原から桜橋を経由する長距離走では霊園の裏山でバイクのガソリンが無くなり、記録をとるために霊園の山道をあわてて走った記憶があります。学生が予備タンクだけで走るように仕掛けたいはずだったのですが。

部活動の指導は陸上部、バスケット部、テニス部で学生と一緒に汗を流しました。陸上部ではよく走りました。自分の記録が伸びるのは楽しかった。軍場君を引率して、全国大会にも出場できました。バスケット部では毎朝シュート練習をしたことを懐かしく思い出します。おかげで大分高専との定期戦で初勝利しました。テニス部は4期生の江口君や中道君、5期生の井原君、重松君、田島君の努力で創設されました。

3面のコートに恵まれ、学生とともに汗を流し、学生ともいろんな試合に出場しました。小倉区内では榎本君や末宗君とダブルスに出場し優勝しました。北九州市庭球選手権大会では第1回大会、第2回大会でシングルスに2連覇しました。下関市の下関オープンテニストーナメントや宇部市の近県庭球大会にも学生と一緒に出場し、優勝もできました。

テニスの高専大会は正式種目までの道のりは長く、正式種目になったのは私が高専を離れてからでした。46年から4高専大会として独自に、部員全員が参加できる大会として持ち回りで開催しました。第7回大会の北九州大会ではシングルス、ダブルスとも決勝は北九州同士の対戦となり、ダブルスは特にベスト4を独占する素晴らしい戦績を残しました。翌年の昭和53年に念願の第1回の全国大会が富山高専で開催されました。団体戦、末宗君のシングルスとも準優勝に終わりました。その後、55年の大会では立花君、福岡君のペアがダブルスで優勝しました。

還暦を過ぎて、退職する現実が頭をよぎるような年齢になっても、高専ですごした日々は今でも鮮明に思い出します。よき先輩、よき同僚、そして、よき学生に囲まれた生活がそうさせると確信しています。伝統ある北九州高専の益々の発展とこれからも優れた人材育成に高専教育が貢献することを心から祈念いたします。



元体育教官池田先生と共に

北九州高専今昔

元総合科学科教官 井手 俊輔

北九州工業高等専門学校の創立40周年を心からお祝い申し上げます。私は、昭和47年11月～平成17年3月の32年6ヶ月間、在職しました。退職して日が浅く、時折り、まだ勤めているような錯覚を覚えることさえあります。

さて、この度、同窓会長から会報への寄稿依頼をいただきましたので私の在職期間中の出来事などを思い起こし、書き連ねることにします。

【授業】本校に赴任する前は大学の助手でしたので座学を担当したことがなく、高専での最初の授業ではどうなることやらと不安と緊張を胸に教壇に立ったのを覚えています。「高専生は優秀だ」との評判を聞いていましたから、私の授業に対し、どんな難しい質問が飛んでくるのだろうという思いが緊張感を増幅したようです。若輩教官の私に気遣ってくれたのでしょうか、幸いに一つの質問もなく、次の授業から安心して授業を進めることができました。昭和45年に発足した化学工学科（現、物質科学工学科）がまだ、5年まで完成しておらず、教官数も充足し



関西支部同窓会で挨拶される井手先生

ていなかったため、私の所属する一般科目(現、総合科学科)・化学と相互乗り入れで授業を分担することになり、以来、私の担当した科目は有機化学、無機化学、分析化学、工業英語、化学演習、機器分析実験、1、2年の化学、卒業研究、金属錯体化学(専攻科)、特別研究と多様でした。私の知識の浅い分野の科目については1時間の授業に対し2時間以上の予習をして授業に臨んだものですが、私自身にとってはとても勉強になり、後になって振り返るとありがたいことでした。

【学内環境及び設備】赴任時は学内のあちこちに未舗装の赤土むき出しの場所があり、雨降りの日は長靴を履いて学校へ向かったものです。学内の設備なども現在とは雲泥の差がありました。パソコンは学内に一台もなく、卒業論文は手書きでした。現在のようなコピー機もなく、保存性の良くないアンモニアコピーでした。図書館は現在のように立派な独立した建物ではなく、現1号館の2階に図書室として存在し、蔵書数は現在と比較にならぬくらい少ないものでした。現図書館に向き合って位置する文化系課外活動施設の建物は食堂として使われていました。雄志台会館内にある現食堂に比べるとメニ

ューは少なく、設備も貧弱でした。教室や教室には冷房はなく、暖房はスチームによる集中暖房方式でしたので午後4時になると寒くても暖房を停止され、実験などで遅くまで居残ることの多かった研究室ではその寒さは厳しく身に凍みました。性能の良い分析機器も十分に備わっておらず、初期の卒研究生は寒い中、寝袋を持ち込んで徹夜で研究に打ち込んでいたのを思い出します。

【クラスマッチ】ソフトボールやバレーボールでは教官のみでチームをつくり、学生諸君と対戦して、かなり良い勝負をしていたように思います。学生諸君には最近ではサッカーの方が、人気があるようですが、当時はホーム・ルームの時間にソフトボールを組み込んで他クラスと対抗戦をして腕を磨きクラスマッチに備えていました。

【クラブ活動】赴任時はラグビー部が非常に強く、全国大会連覇中でしたが、その他のクラブはなかなか好成績を収められず、全国大会に100名前後の選手を送り込む現在の盛況ぶりは想像だにできませんでした。是非、この素晴らしい活躍を今後も続けてほしいものです。

【通学手段】モノレールもなくJR日田彦山線の志井公園駅もなかったので通学にはほとんどの学生がバスを利用していました。私は三萩野バス停経由でしたが、高専に至る沿線に高校、大学などが数多く存在しており、ラッシュ時には満員通過のため、なかなか乗車できませんでした。あわてて、タクシーを拾い授業に間に合わせたことも幾度となくありました。楽に座席に座れる今ではとても考えられないことです。

【結び】設立初期の学生諸君は創意と工夫で当面する問題に立ち向かいました。そして、骨太の芯の強い学生が数多く巣立ち、社会で好評評を得てしまし

た。その先輩諸氏の築いた基盤の上に現在の高専があるわけです。当時に比べ、設備や周囲の環境は整備され、現在の学生諸君は非常に恵まれています。それに甘えることなく、先輩に追いつけ、追い越せの気概を持って学んでほしいというのが今後の高専生への私の願いです。

北九州工業高等専門学校のますますのご発展を祈っています。

その頃「ACU」という雑誌があった

烏 冬青

昭和 49 年青葉の目にしみる頃、転勤して来て間もない自分の部屋に数名の学生が訪ねてきた。庄野憲治（5M）は、「歴史に関心をもつ有志で研究会を作りたい。是非顧問になってほしい」といった。工科系の学校に歴史の研究会。自分はわが耳を疑った。庄野はいった。「われわれが目指しているのは新しい型のクラブ活動。先輩後輩の封建的関係を断ち、この活動が会員の負担にならないようにする。自由平等こそがわれわれの合言葉であり、会長等『長』のつく制度はつくらない」と。

高専に歴史好きの学生がいようとは想到もしなかった。かれらの問題意識の高さにも驚いた。すぐに、今吉和弘（5C）、恵良隆幸（4M）、奥森祥陽（3C）、甲斐田貴（同）、清水毅、高岡光（4E）、田中修（同）、浜野幸生（3E）、藤本朗（5C）、前田由樹（3C）、前田吉寛（3E）、山本洋祐（5C）、油嶋武晴（同）が集り、研究会を始めた。週 1 回の成果は、51 年「ACU」第 1 号となって現れた。論考は、バビロニア（今吉）、テーベのアメン神殿復興碑文（前田由）、パリ・コミューン（高岡）、下克上（甲斐田）、明治維新（山本）に到るまで、古今東西に亘った。山本は、明治

維新と尊王攘夷を次号にまたがって掲載、講座派の絶対主義を批判、ブルジョア革命説を展開した。参考文献には鹿野正直、上山春平、奈良本辰也、羽仁五郎、ソブールなどが上げられていて、文献渉獵力に舌を巻く。

「高専祭特別号」と銘打った第 2 号は、初期の植民地インド（前田吉）、結婚について（庄野）、伊勢神宮の起源（奥森）、などが掲載、なかでも会員外の花田由紀夫が「御坂峠」という太宰治『富嶽百景』に対する長い評論を寄せた。花田は母が文学少女で、彼に由紀夫と命名するほどに三島に傾倒していたと言ったことがある。

昭和 52 年になると、世代が替わり、奥森や前田（由）が牽引車となった。新加入の 2 年生原田浩幸（2C）は「怒れる志士・高杉晋作」で、西郷との確執を軸にその生き方を論じた。晋作の辞世の句「おもしろきこともなき世をおもしろくすみなすものは心なりけり」は、その後の原田の人生に大きな影響を与えたように見える。原田は「我々はただ歴史を研究するものではない。頼山陽の『日本外史』のごとく、歴史を通してわれわれの思想を主張するものである」と、咆哮した。

昭和 54 年、5 号になると、タイプによる横書きと紙面を一新した。内山鶴雄（1M）、橋本和之（同）が加わり、3 年の今村剛（3C）も入会した。この号には奥森等常連のほか、内山が「豊前について一国分寺一」という 1 年にしてはアカデミックな論考をよせた。森永哲郎（5E）はマンガの功罪を論じた。会発足以来 4 年、前田（由）はあとがきで「義理人情とか落とし前をつけるとか、筋を通すとかいうと、やくざのように聞こえますが、これはわたしがとても好きな言葉です。いくら頭がよくても、外見がよくても、社会的地位があろうとも、不義理を行なう人は最低です。私はこの高専に来て、歴史研究会に入って人間の生き方のもっとも基本になるものを

学びました」と、会の存在意義を謳い上げた。この号には着任間もない坂口浩先生の「学問・学校」という長大な文章が寄稿され、会誌に彩を加えた。

昭和55年になると、井上勇二(2M)、中部宏文(同)、山下隆義(2E)、丸太基智雄(2C)、小早川倫明(1M)、富吉竜一(同)、中村泰久(同)、佐藤満章(1C)、渡辺和則(同)、前山博史(同)が入会、執筆した。「京の千年」(富吉)、「藩政の改革と騒動」(佐藤)、「黒崎周辺」(中村)、「竹並遺跡」(丸田)、「日本鉄道」(渡辺)、「パーレビ体制」(中部)、「北九州市の成立」(井上)、「歴史的リアリズム」(原田)と多彩である。内山は、今回は詩歌に託し、郷土を語った。作品の1、2を紹介しておく。

ひとすじの英彦の流れ清らかに

注ぐ大河は京都に通ず

天高く夕陽に紅き三重の塔

国分の丘に姿を映す

この頃になると、原田は映画評論に傾斜し、短歌や俳句が寄せられるなど、会誌の性格が大きく変貌しつつあった。

自分は、不幸にして「ACU」の終焉を知らない。若き学徒が、それぞれに力いっぱい自己主張したこの会誌を見るにつけ、古きよき時代だったとの感を深める。いやいつの時代でも、思春期は誰でも哲学者であり、真理の探求者であり、人生の思索者であったのでないかと思う。

時あたかも中国の文化大革命が終わり、国内の学園紛争も終息しつつあった。この会誌にも時代の空気を敏感に吸い取っていた学生の姿がある。今や社会の牽引車となり、人生の大道を歩いている諸君を想像するにつけ往時を思い出す。それに引き換え、「日暮れて道遠し」の念に打たれて佇立する自分がある。

附記

鳥 冬青とは、日高一宇のこと。いつの頃か鳥になり、嫌われ者になった。自分では神武天皇の大和入りを案内したヤタ鳥との自負はあるのだが。

青春

校門を入ってすぐ右の一角に、第3代田口胤三校長が寄贈された記念のモニュメントがある。



青春とは人生のある時期をいうのではなく
心の様相をいうのだ

年を重ねるだけで人は老いない

理想を失う時にはじめて老いがくる

歳月は皮膚のしわを増すが

情熱を失う時に精神はしばむ

人は信念と共に若く 疑惑と共に老いる

希望ある限り若く 疑念と共に老いる

希望ある限り若く 失望と共に老い朽る

サミュエルウルマンの詩 「青春」より

三代校長 代田口胤三